一日目　平成三十年五月二十六日（土）　午前十時始
二日目　平成三十年五月二十七日（日）　午前九時半始

第七十回

望宝会

於・石川県立能楽堂

電話・二六四・二五九八

御挨拶

いよいよ篁宝会大会も七十回の古稀をむかえる事となりました。

近年、新しく入会し、稽古を始める方よりも、身体の都合で稽古を続けられなくなったり、病気でおなくなりになる方が多くなりました。

七十回の歴史を考えて、追善の心と新しく生きる気力を表現できる会になればと念じています。

能は今村良栄様がお孫さんのひとみさんと共に「桜川」に取り組んでいます。

舞囃子は二日間で十六番、しかも楽、神楽、序の舞物と相当こってりした番組になりました。

ところが囃子方不足でやむをえずいろいろ他所から応援いただく事となりました。

特に大鼓の河村裕一郎師（石井流）は名古屋より、柿原孝則師（高安流）は東京より御出演が決まり、ほっとした気持ちと緊張を感じています。

御両人とも名家の若い御子息です。

会員の総力を出しきった舞台をつとめます。御友人お誘い合わせ是非御来堂いただき、舞台や茶席をお楽しみ下さい。美濃の多治見にて楽しみにひねった近作の茶碗にて呈茶させていただきます。

能楽堂は前庭工事の為、駐車できません。石引駐車場を御利用下さい。駐車料金の補助（駐車券提示）が能楽堂にて受けられます。

会員一同・心よりお待ち申し上げます。

藪　俊彦

会員一同拝

一日目 平成三十年五月二十六日(土) 午前十時始

番組

七宝

(連吟)

全員

羽衣

(素謡)

堀 順子

(地謡)

布施美枝子

杉田喜久子
岡田 睦子
木戸口郁子
俵 世婦

西村紀代子
木戸 玲子
竹中 紀子

藤

西村 智子

(地謡)

藤井 千秋

戸田 淑子
村谷 和子
村島 康子
布施美枝子

末松 洋子
谷田 晶子
畔柳萬城子

養老

三ッ野潤也
山岡 道直

(地謡)

岩田 貞広

坂本 義明
柴野 英雄
中島 範雄

北川 祐一
越島 良三
法録 信明

東北

中川百合子

(地謡)

杉田喜久子

小野田佳恵
堀 順子
岡田 睦子

谷田 晶子
池田登美子
畔柳萬城子

杜若

竹中 紀子

(地謡)

小野田佳恵

西村紀代子
安田 嘉子
南部 光枝
池田登美子

胡蝶

池田登美子

(地謡)

宮川玲以子

藤井 千秋
西村 智子
末松 洋子

西村紀代子
木戸 玲子
中川百合子

(仕舞)

紅葉狩 谷田 祐衣

(地謡) 富田 孝
藪 俊彦
長野 裕

船弁慶(キリ) 杉岡 浩樹

高砂　法録　信明
小歌　畑田　好弘

（地謡）越島　良三　藪　俊彦　長野　裕　中島　範雄

熊野（クセ）　藤井　千秋
田村（クセ）　堀　桂子
胡蝶　宮川玲以子

（地謡）高橋　右任　藪　俊彦　川島　英治

養老　俵　世婦
草紙洗　木戸口郁子
鉄輪　谷田　晶子

（地謡）川島　英治　藪　俊彦　高橋　右任　中村　清

―十二時頃―

翁

（素謡）富田　孝　杉岡　浩樹

（地謡）安村　俊幸　法録　信明　越島　良三　北川　祐一　長野　裕　大間　豊光　藪　俊彦　中村　清　吉本　正彦

鶴亀（クセ）（仕舞）富田　孝

右近

（素謡）多田芙美子　泉　準子

（地謡）横川　節子　多田　弘美　柏山　和子　明石　啓子　宮崎　君子　山代紀久代

巻絹

宮下　友文　義本　高明　畑田　好弘

（地謡）大間　豊光　長野　裕　松島　維成　小柳　健二　山岡　道直

（素　謡）

鶴亀

曲入

安田　嘉子
南部　光枝

（地謡）
池田登美子
任田　隆子
平田　照子
土川　喜枝
西村紀代子
小柳　和子

桜川

越島　良三
法録　信明
中島　範雄

（地謡）
北川　祐一
中村　清
長野　裕
安村　俊幸

小督

山代紀久代
多田　弘美
横川　節子
明石　啓子

（地謡）
宮崎　君子
多田芙美子
泉　準子
柏山　知子

（舞　囃子）

養老

峯の嵐

山岡　道直
河村裕一郎　住駒
大橋　紀美　瀬賀　尚義
俊介

（地謡）
三ツ野潤也　岩田　貞広
高橋　右任　藪　俊彦　川島　英治

藤

クセ上より

畔柳萬城子
柿原　孝則　住駒
大橋　紀美　瀬賀　尚義
俊介

（地謡）
高橋　右任
藪　俊彦
川島　英治

野宮

昔を思う

岡田　睦子
河村裕一郎　住駒
俊介
室石　和夫

（地謡）
藪　俊彦
衣斐　正宜
川島　英治

天鼓

打ならす
バンシキ

長野　裕
柿原　孝則　住駒
俊介
室石　和夫

（地謡）
藪　俊彦
高橋　右任
川島　英治

—一時半頃—

西行桜

（連吟）
谷野恵美子
中瀬みさを
宮越　圭子

（素謡）
松島　維成　大間　豊光

（地謡）
宮下　友文
長野　裕
義本　高明
畑田　好弘

綾鼓

玉葛

（仕舞）
戸田　淑子
村島　康子
村谷　和子
末松　洋子

経政（クセ）

桜川（クセ）

鵜之段

（地謡）
高橋　右任
藪　俊彦
川島　英治

高野物狂（クセ）

（地謡）
有本　順子
任田　隆子
喜多　紀子
八代　啓子

—三時頃—

花筐（クルイ）

（地謡）
藪　俊彦
衣斐　正宜
高橋　右任

融（千重ふるや）

（舞囃子）
木戸　玲子　柿原　孝則　住駒　俊介　大橋　紀美　室石　和夫

（地謡）
川島　英治
藪　俊彦
高橋　右任
山岡　道直

冨士太鼓（なをも）

（地謡）
小柳　和子　河村裕一郎　住駒　俊介　瀬賀　尚義

（地謡）
藪　俊彦
衣斐　正宜
川島　英治

杜若（クセより）

（地謡）
中瀬みさを　河村裕一郎　住駒　俊介　大橋　紀美　室石　和夫

（地謡）
藪　俊彦
衣斐　正宜
高橋　右任

紅葉狩（さなきだに急の舞）

（地謡）
中村　清　柿原　孝則　住駒　俊介　瀬賀　尚義

（地謡）
藪　俊彦
高橋　右任
川島　英治

以上

—四時半終了予定—

二日目　平成三十年五月二十七日(日)　午前九時半始

番　組

	(素　謡)		(地謡)
橋弁慶	森田　喜一	段證　武邦	菊地　誠 加野金次郎 森　昌秋
氷室	坂本　義明	吉本　正彦	中村　清 長野　裕 富田　孝 佐々波善吉
鞍馬天狗	佐々波善吉	柴野　英雄	小柳　健二 森田　喜一 坂本　義明
大江山	菊地　誠	森　昌秋 吉本　正彦	佐々波善吉 中村　清 柴野　英雄

(仕　舞)

高砂	森田　喜一		
八島	吉本　正彦		
三山	小柳　健二		
右近	出村　和子	(地謡)	高橋　右任 藪　俊彦 高橋　憲正
羽衣(キリ)	向井由美子		
経政(キリ)	西村　智子		

（舞囃子）

羽衣（バンシキ クセより）　有本順子　河村裕一郎　住駒俊介　麦谷清一郎　室石和夫

（地謡）小柳和子　任田隆子　木戸玲子　平田照子　松田若子　土川喜枝

雲林院（クセより）　浜元忠子　河村裕一郎　住駒幸英　麦谷清一郎　瀬賀尚義

（地謡）藪俊彦　金森秀祥　高橋憲正

井筒（恥かしや）　喜多紀子　柿原孝則　住駒幸英　瀬賀尚義

（地謡）金森秀祥　渡邊荀之助　高橋憲正

三輪（クセより）　八代啓子　柿原孝則　住駒俊介　麦谷清一郎　室石和夫

（地謡）藪俊彦　衣斐正宜　高橋右任

（素謡）

小督　森越貞子　谷内玲子　栗山静子

（地謡）出村和子　早崎千春　菊池恭子　浜元忠子　向井由美子

（仕舞）

鶴亀（クセ）　平田照子

（地謡）藪俊彦　渡邊荀之助　金森秀祥　高橋右任

（独吟）

隅田川　上村彌壽男

葵上　加野金次郎

―十一時頃―

（舞囃子）

—一時頃—

邯鄲

飲めば 西村紀代子　河村裕一郎　麦谷清一郎
住駒 俊介　室石 和夫
（地謡）藪 高橋 右任　俊彦　高橋 憲正

松風

こなた 早崎 千春　柿原 孝則
住駒 幸英　瀬賀 尚義
（地謡）渡邊荀之助 金森 秀祥　高橋 右任

梅枝

さるにても 任田 隆子　柿原 孝則
住駒 俊介　瀬賀 尚義
（地謡）衣斐 正宜 金森 秀祥　高橋 憲正

歌占

指を折って 土川 喜枝　柿原 孝則
住駒 俊介　瀬賀 尚義
（地謡）衣斐 正宜 金森 秀祥　高橋 右任

—二時半頃—

（能）

桜川

桜子 今村ひとみ
母 今村 良栄
住僧 北島 公之
人商人 苗加登久治
大鼓 河村裕一郎
小鼓 住駒 幸英
笛 室石 和夫
後見 衣斐 正宜
藪 俊彦
（地謡）安村 俊幸　高橋 右任
北川 祐一　渡邊荀之助
長野 裕　金森 秀祥
中村 清　高橋 憲正

以上

—四時終了予定—

能「桜川」のあらすじ

九州日向国（宮崎県）桜の馬場の桜子は、東国方の人商人（ひとあきびと）に我が身を売り、その身代金と手紙を母に渡してくれとたのみ、国を立ちます。母は人商人から手紙を受けとり読んでみると、母の貧しさを悲しむ余り身を売りました、名残り惜しいが、母上もこれを縁に御出家下さいとあります。驚いてあたりを見ると、もう人商人はいません。母は嘆き悲しみ、氏神の木華開耶姫（このはなさくやひめ）に我が子の無事を祈り、その行方を尋ねて旅に出ます。〈中入〉それから三年がたち、常陸国（茨城県）桜川は丁度桜の季節です。桜子は磯辺寺に弟子入りしており、今日は師僧に伴われて、近くの桜川という花の名所にやって来ます。桜川にたどりついた狂女は、九州からはるばるこの東国まで、我が子をもとめてやって来たことを語り、失った子の名も桜子、この川の名も桜川、何か因縁があるのだろうが、春なのにどうして我が子の桜子は咲き出でぬのかと嘆きます。更に、桜を信仰するいわれ、我が子の名前の由来、桜を詠じた歌などを語り、散る花を抄（すく）い上げ興じ狂います。僧は、これこそ稚児の母であると悟り、母子を引き合せます。二人は嬉し涙にくれ、連れ立って帰国します。

【みどころ】失った子をさがし求める能として、『三井寺』と「桜川」は対照的です。片方は秋の月、片方は春の桜が背景となっています。やはり春の「桜川」の方が同じ狂女物でも華やいだ雰囲気があります。

物語の発端、狂乱の原因の説明があって事件が展開し、めでたく再会するという風に、終始がはっきりしています。

ストーリーとしては現実的で悲惨な感じですが、能全体は意外に明るいのです。

〈カケリ〉は、狂女が桜花を見ながら我が子を慕う様を示します。桜の花の散りかかるのを追って舞う〈イロエ〉、クセにつづいて〜あたら桜の」から〜我が桜子ぞ恋しき」地謡と掛合いで謡ながら、小道具の抄（すく）い網を持ってまう件（くだり）を〈網之段〉といい、型どころ、謡どころで、一曲の山場です。普通、狂女は笹を持つのですが、この能では、抄（すく）い網がその代わりになっています。異例ですが、この能の特色でもあります。

＜観能メモ＞

◇「入場無料」でございます。御同好お誘い合せ御来場下さいませ。

◇時間は推定につき多少の遅速お含み下さい。御出演の方はおくれぬように、御出演一番前に楽屋に入るように御留意下さい。

◇休憩室(食堂)にてお茶の用意がしてあります。季節の花寄せも行います。お抹茶一服どうぞお召しあがり、おくつろぎ下さい。

◇駐車場は県営石引駐車場を使って下さい。駐車券を能楽堂事務室に呈示して割引券をもらって下さい。

篁宝会

〒921-8148
金沢市額新保一-四八四-一　藪　俊彦方
電話　二九八-一一一八番